

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ヘジェ・フィヤカ・エゾ：
近世における日本と中国の北方民族に対する認識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4876

三 ヘジエ・フィヤカ・エゾ

——近世における日本と中国の北方民族に対する認識——

佐々木史郎

1 はじめに

民族あるいはそれに類する集団を識別、類別するという行為は、一九世紀に欧米で生まれた人類学や民族学だけの特権ではない。自分たちを取り巻く人々を民族に類する集団に区分して名称をつけて記録に残すという行為は、多くの地域で多くの人々によって行われてきた。それは東アジア世界を構成する日本や中国、韓国・朝鮮も例外ではない。古代中国の東夷、西戎、南蛮、北狄はそのプロトタイプのようなものだが、日本でもエミシ、ハヤトなどの周辺地域の人々に独自の名称を付して集団識別していた。そのような伝統は、一九世紀後半から二〇世紀にかけての時代に、東アジア諸国が次々と近代国家へと脱皮するまで保持される。

古代の文献に登場する集団の民族的な属性を議論することは難しいが、一七世紀ぐらいになると、文献記録と口頭伝承や現在まで残されている物質文化、儀礼などとの照合によって、ある集団の民族的な属性まで探ることが可能に

なる。それどころか、これらの時代の集団識別が現在まで受け継がれ、住民たちの意識の中で一定の存在感を持ち、近代の民族学や人類学による民族分類や住民自身の民族意識に影響を及ぼすこともある。本章で論じるアムール川下流域からサハリンにかけての地域でも、一七世紀以来日本や中国、ロシアが行ってきた住民に対する民族的な集団識別や区分が、今日の先住諸民族の民族的な区分と意識に一定の影響を与えている。

この地域は現在でこそロシア領とされているが、一九世紀中期までは江戸幕府の日本と清王朝の中国、そしてロマノフ王朝のロシアの三者にとつての辺境地帯であり、境界地域であつた。現在ロシア極東地域の「先住民族」あるいは「少数民族」とされている人々の祖先たちは、当時は先住民族でも少数民族でもなく、その地方の主要な住民だつた。彼らは現在ロシアの政策により、「民族」という枠組みに分類され、彼ら自身もその民族への帰属を意識しているが、それが成立したのは一九三〇年代であり、帰属意識として定着するのは五〇年代以降である「佐々木二〇〇一」。それ以前はロシア、日本、中国で使われていた慣習的な区分や名称と、住民自身の自称や相互呼称が複雑に重なり合つていた。しかも、ロシアと中国が現在の国境の原型となる北京条約を締結した一八六〇年までは、この地域におけるロシアのプレゼンスはほとんどなく、この地域の住民の集団帰属意識、区分意識に強い影響を与えていたのは、江戸幕府と清朝の辺境政策だつた。

本章ではその江戸時代の日本と清朝の中国がこの地域の住民をどのような政策に基づき、どのように区分し、どのように認識していたのか、そしてそれらの区分が近代民族学による民族分類とどのように異なるのかということ論じる。そのためにまず、一七世紀から一九世紀における日本側の住民区分と中国側の住民区分について論じ、さらに西欧の民族学による民族分類との比較を行う。この住民に対する民族的な区分・分類の相違から、日本と中国の北方辺境支配の相違、さらに東アジアの前近代的な国家による支配と、西欧から生まれた近代的な国家による支配の特徴を洗い出す。

なお、ここでは「エゾ」、「ヲロツコ」といった差別的な意味合いを持つ住民呼称や民族名を使用することがあるが、それはあくまでも原典で使われた、あるいは考察対象とした時代に使われた呼称を引用しているのであり、もとよりその集団に属する人々をおとしめるものではない。現在の民族名が指し示す人々の範囲とその祖先と思われる人々を指すとされる過去の名称が指し示す人々の範囲は厳密には一致しないため、その時代の状況を正確に表すためにあえて古い名称を引用せざるをえなかった。したがって、現在の民族を表すときには必ず、「アイヌ」、「ウイльта」など当該民族の人々が公称とする名称を使用することとしている。

2 松前藩と江戸幕府による住民区分

北海道、千島列島、サハリン（カラフト）からなる江戸時代当時の「蝦夷地」の住民は基本的に「エゾ」（蝦夷）と呼ばれた。彼らはほぼ現在のアイヌ民族の人々の直接の祖先に当たる。しかし、そのエゾの人々以外にも北方世界には独特の異集団がいた。その「エゾ」以外の北方の人々の実際の姿が知られるようになるのは、江戸時代も中期に差しかかった一八世紀前半である。一七三九年（元文四年）に刊行された坂倉源次郎の『北海随筆』に初めて「サントン」ということばが登場する。

此タライカより北方にあたりて、サントン、マンチウと云所有、是北高麗也と松前者は云へり。錦、青玉等も此両国より渡り来るをタライカの者共領国へあきなひに行て、常に交易するとなり。言語は夷とは亦違ひて、通ぜざる故、タライカの幼稚なる者を渡して言語習はせ、是を以て通辞とせり。サントン、マンチウともに文字も有り、人物能、米、鮭、たばこも有り。鉄類を望む故、鍋、釜、出刃の類を渡すと也〔坂倉 一九七二、四九頁〕

源次郎は「サントン」を蝦夷地のさらに向こう側にある地域の名前として言及したが、後にそれがその地方に暮ら

す住民の集団名としても知られるようになる。サンタンは漢字で山丹、山旦、山韃などと表記され、大陸から松前藩經由でもたらされた絹織物が「蝦夷錦」と呼ばれるとともに、その布で作られた服は「山丹服」などとも呼ばれた。

サハリンからさらにその北方に連なる地域についての情報は、松前藩もかなり有していたと考えられるが、その地域の住民についての詳しい情報が入るようになるのは、幕府が本格的に蝦夷地調査を始めた一八世紀後半以降である。幕府主導によるサハリン調査は、一七八八年と八九年（天明一年と寛政元年）の大石逸平らによるサハリン南端の調査から始まり、一七九二（寛政四）年の最上徳内らによる調査、一八〇一（享和元）年の高橋次太夫と中村小市郎による調査、一八〇八年の松田伝十郎と間宮林蔵による調査、一八〇九年の間宮林蔵による調査と続き、一九世紀初頭までにかなり詳細な情報が幕府の下に集められた。「サンタン」と呼ばれる人々の存在は、「山丹服」などの言葉で本州以南の人々にも知られるようになったが、その実態が判明するのは、これらの一連の幕府主導の調査の結果である。

サンタンに続いて、エゾ以外の北方住民としては「スメレンクル」が一八世紀末に登場する。最上徳内が残した『蝦夷草紙後編』に、「昔シカラフトの蝦夷人マンテケの奥に行しに、シメレーをいふ国に至る。此国の人物は山韃人に均し。」「最上 一九七二、四六九頁」という一説がある。その中の「シメレー」というのがおそらく「スメレンクル」に相当する。「ウンクル」というのは、アイヌ語で「ウの人々」（ウン・クル）と解釈できることから、スメレンクルは「スメレの人々」と解釈できる。シメレーとはスメレと同じ言葉であると考えられる。これに関して、近藤重蔵はその名著『辺要分解図考』で、「シシレイ又ヌメレンクル 蝦夷人云昔シ北方ノ地ヲ歴覽セシモノアリ人跡絶タル所ニ到ル夏月雁遊フ所アリ是シメレイノ国地也ト又カリヤシン云シメレイハ滿江ノ疏末ノ地ニ居ル又カラフトノ極北ニヌイプトノ先ニ居るとも云一説ニノテトヨリウシヨロノ辺エ常ニ往来ストモ云」〔近藤 一九〇五、三四頁〕（なお、シシレイはシメレイの誤記、ヌメレンクルはスメレンクルの誤記と考えられる―筆者）と述べていて、シメレイ

(シメレー)とスメレンクルが同じ人々を指していることを明らかにしている。

サンタンとスメレンクルに関する情報は、最上徳内の調査の九年後に当たる一八〇一(享和元)年にサハリンを調査した中村小市郎と高橋次太夫の記録でさらに充実する。ことに中村小市郎が残した『唐松の根』(あるいは『唐太雑記』)には、サハリン南端の白主に設置された会所(交易場でもあり、役人の詰め所でもある場所)に來航していたサンタンとスメレンクルの人々からの聞き書きが残されている。彼が聞き取りをしたのは、キジ村(キジ湖とアムール川の合流地点にある)からやってきたサンタンのリーダーだったブヤンコ、その従者で宗谷のアイヌ出身のカリヤシン、そしてタイカサン村(アムール河口近くにあったヘーシ・ピリヤウオ村に当たる)のスメレンクルのリーダーだったカンテツカの三名である。彼らから、大陸での生活、イチヨホツトへの朝貢と交易の旅、そしてアムール川流域の村々の名称と住民区分についての情報を得た。

他方、小市郎自身は東海岸を少々北上してアイヌ居住地を踏査しただけだったが、サハリン北部についても聞き取りによって詳しい情報を得ている。それによれば、サハリンにはまだ「ニクブン」、「ルモウ」、「ヲロツコ」、「タライカ」と呼ばれる人々がいたことが知られている。ニクブンは現在のサハリン東海岸北部からティミ川流域にいた人々、ルモウはティミ川流域の人々、ヲロツコは東海岸からティミ川、ポロナイ川流域にかけての内陸部でトナカイ飼育に従事する人々、そしてタライカは現在のタライカ湾沿岸あるいはタライカ湖畔にいた人々だったと考えられる。「中村小市郎 一八〇一」。

中村小市郎と高橋次太夫の調査からさらに七年後の一八〇八(文化五)年に松田伝十郎と間宮林蔵による調査が行われる。「松田 一九七二、間宮 一九八五」。この二人の調査によってサハリンと大陸の間の海峡が確認され、サハリンが島であることが日本側に初めて知られることになった。そして、翌一八〇九(文化六)年には間宮林蔵の単独探検が行われた。彼はまず、サハリンと大陸との間の海峡(タタール海峡)を縦断して西海岸のスメレンクルの最北

の村ナニヤー（現在のルイブノエ村に当たる）まで到達し、さらに海峡を横断して大陸側に渡り、アムール川をさかのぼって、清朝の出張所があったデレンまで赴いて、アムール川流域とサハリンの住民の清朝に対する毛皮貢納と交易の実態をつぶさに観察した。その過程で、彼は様々な地域の住民についての情報を得ていく。

例えば、サハリンから大陸に渡ったときの上陸地点では、そこより南にいるキヤカラという住民の存在を知り、アムール川本流域に入ってしまったとき、サンタンの居住地を通過した後、ウルゲーという村より上流でコルデッケと呼ばれる住民と出会った。終着点のデレンではアムール川下流域の全域から人々が集まっていたが、そこで彼に親しく接したのは、三姓からやってきた三人の高級役人たちで、彼らは満洲人だった。林蔵はデレンからの帰り道にはアムール川を河口まで下るルートを選んだが、その途中ボルという村でサンタンとスメレンクルの居住地の境界を確認した。さらにホンコ川（現在のアムグニ川）とアムール川の合流地点付近でイダーと呼ばれる人々の村を遠望している。イダーの奥にはキーレンがいた。林蔵はスメレンクルの居住地域の中を抜けてアムール川を河口まで下り、海峡を南下して、サハリンから大陸への渡り口にあたるノテト（あるいはティク）の村に帰還した。

間宮林蔵までの調査の結果、幕府はサハリンとアムール川流域に関する地理と住民に関する詳しい情報を手に入れた。最上徳内の調査結果は『蝦夷草紙』と『蝦夷草紙後編』とに盛り込まれ、高橋次太夫と中村小市郎の調査は「唐太並に山丹人の義元番人え相尋候書付」と「中村小市郎高橋次太夫より唐太見分の儀申上候書付」という二本の幕府への報告書にまとめられた（これら後に羽太正養の『休明光記』付録巻七に収められた）。「羽太 一九三七」。彼らのデータは一八〇四年に刊行された近藤重蔵の『辺要分界図考』のサハリン、アムール川流域に関する考察の基礎になっている。また、それらとは別に中村小市郎は「唐松の根」というフィールドノートに類する記録を残している。それは明治時代に河野常吉によって校訂され、「唐太雑記」として出版された。

松田伝十郎は一八〇八年から二一年まで及んだ「北蝦夷地」（サハリン）²での在勤時代を『北夷談』という回顧録

にまとめたが、そこにサハリンの地理や民族誌情報をふんだんに盛り込んだ。間宮林蔵は二回の調査結果を『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』の二本の報告書にまとめ、また、『舟行里程図』という地図と調査した村落の間の距離を記したデータを作成して幕府に提出した。それはサハリンとアムール川流域に関する詳細な地誌であり民族誌だった。後にシーボルトがその写しをドイツ語に抄訳して、彼の主著『日本』に掲載したことで、ヨーロッパの地理学、民族学でも林蔵の業績が知られるところとなった。

一八世紀後半から一九世紀初期にわたる幕府主導の調査の結果、サハリンからアムール川流域にかけての地域の住民の分類が確定することとなった。間宮林蔵までの調査者たちの住民区分をすべて洗い出してみると、サハリン（カラフト）ではエゾ、タライカ、ラロツコ、スメレンクル、ニクブン、ルモウといった区分がなされ、大陸ではスメレンクル、サンタン、コルデツケ、キヤツカラ、イダー、キーレンといった区分がなされている（図1）。

エゾ（蝦夷）とは今日のアイヌの祖先たちを指す。ただし、サハリンのアイヌ（カラフトアイヌ）には「エンチウ」という北海道のアイヌにはない自称があり、自らを北海道の仲間とは明確に区別していた。また、言語も相当異なり、文化には北隣のニヅフ、ウイルタ、さらには大陸のウリチ、ナーナイらの影響があり、時には満洲や中国の文化の強い影響すら見られた（図2、図3）。

江戸時代の調査者たちはサハリンのアイヌを北海道の人々と文化的に近い集団であると認識していた。間宮林蔵も、「此島の人物南方凡百五、六十里の間は大抵蝦夷島に異なる事なし……」〔間宮 一九八五、三四頁〕と述べている。しかし、眉の形、髪型、衣服、食事などに相違をみとめていた。また、当時そのサハリンのアイヌの中にも独特の名称を付された集団が認められていた。それは「タライカ」あるいは「タライカ人」と呼ばれた人々である。

ここはサハリンのアイヌの間でも比較的早くから大陸側との交易を行っていたことが知られており、一六四三年にタライカ湾に接近したオランダの艦隊を指揮していたフリース船長の記録では、この頃すでにこの地方のアイヌが毛

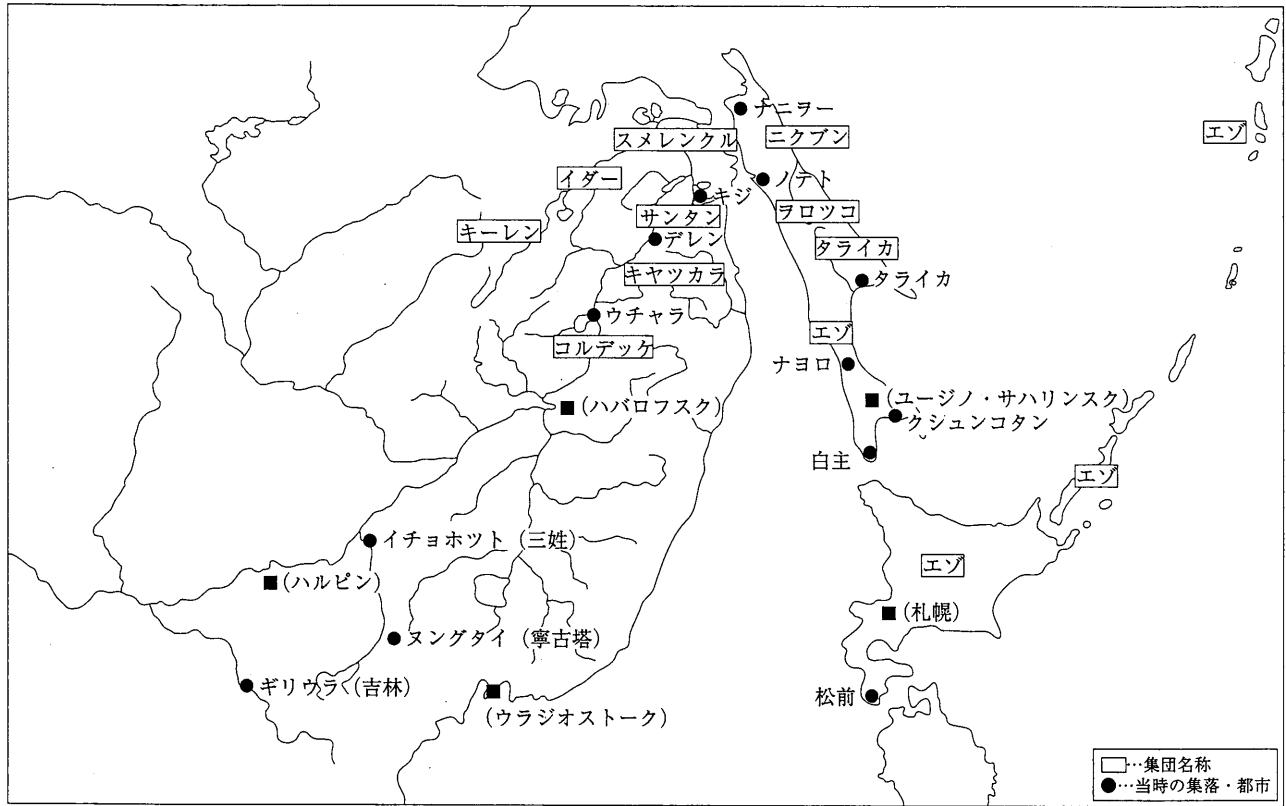
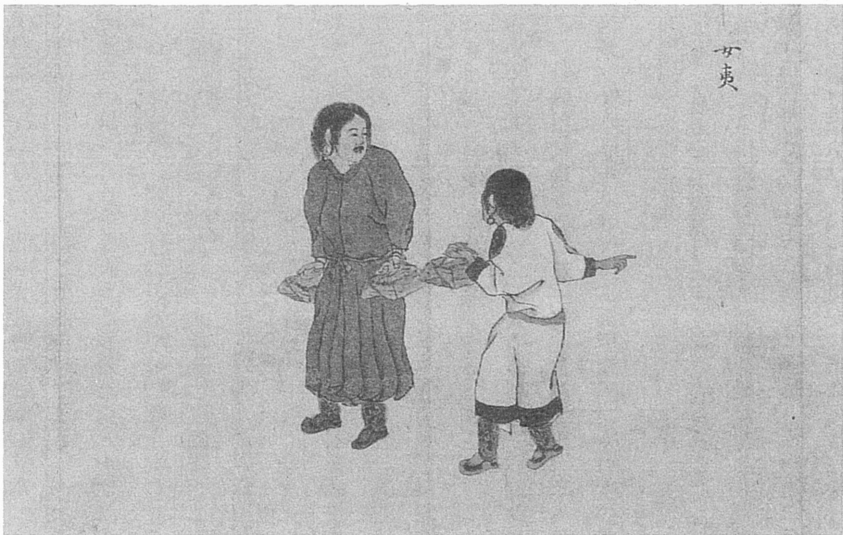


図1 江戸時代の住民分布



『北夷分界余話』（国立公文書館蔵）より。

図2 エゾ（アイヌ）男性



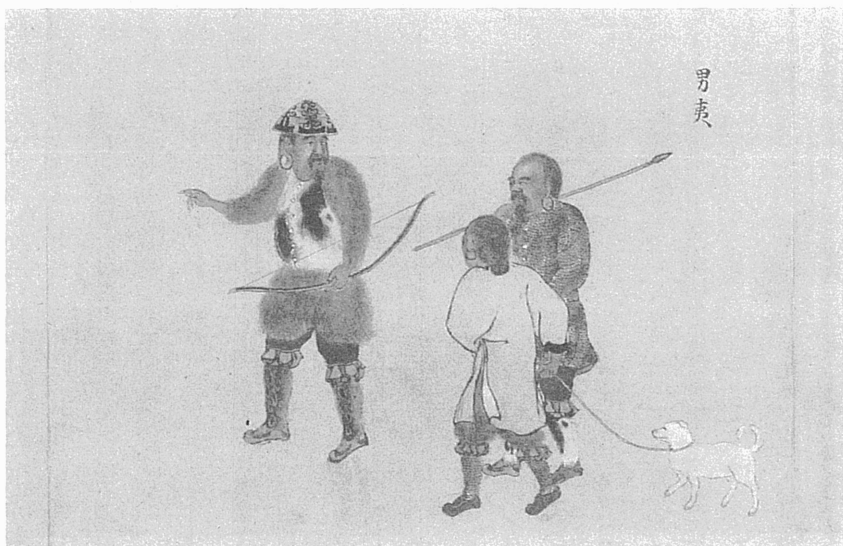
『北夷分界余話』（国立公文書館蔵）より。

図3 エゾ（アイヌ）女性

皮を持って大陸側に交易に出かけていたことがわかる〔北構 一九八三、八六一―八七頁〕。また、先に引用した坂倉源治郎の『北海随筆』でも、サンタンと取引していたのはタライカの人々だった。そして、一七四二年（清の乾隆七年）にキジ村で起きた殺人事件の際に、清の役人が被害者側の証人を求めてやってきたのもこの地域だった〔遼寧省檔案館等 一九八四、四〇五―四一九頁、松浦茂 二〇〇三、三三二頁〕。タライカ（満洲語ではダリカ・ガシヤン）には清朝にトー・ハラと登録されたアイヌの有力者の一族がいたからである。彼らとともに登録されたシュルングル・ハラの村とされたクタンギ・ガシヤン（アイヌ語ではコタンケシ・コタン）もこの近くにあったことから、彼らもタライカ人の仲間と見てもいいかもしれない。ただし、タライカとコタンケシの有力者の一族は一八世紀末までには没落したらしい〔中村小市郎 一八〇一、五五―五六頁、佐々木 二〇〇八〕。

カラフトアイヌやタライカの存在はアイヌの低位集団なのか、別の独自の集団と見るべきかは民族学、人類学の議論でも分かれるところである。それと同様、ニヅフについても、現在の人類学、民族学で一民族とされていながら江戸時代には複数の集団が認められていた。すなわち、スメレンクル、ニクブン、ルモウなどである。特に日本ではスメレンクルとニクブンの区分へのこだわりが強い。中村小市郎から間宮林蔵、さらには幕末の松浦武四郎（彼は一八四六年と五六年にサハリン南部を踏査している）に至るまで、サハリン西海岸北部の住民をスメレンクル、内陸のテイミ川流域から東海岸北部の住民をニクブンとする区分が定着していた〔中村小市郎 一八〇一、間宮 一九八五、松浦武四郎 一九七七〕。そして小市郎の聞き取り調査と林蔵の実際の踏査によって、スメレンクルがアムール川流域の最も下流の沿岸とタタール海峡に面した海岸にもいたことがわかっていく（図4、図5）。

スメレンクルとニクブンが社会的にどのような関係にあったかは定かではないが、彼らとアイヌとの間は友好的ではなかった。松田伝十郎が初めてサハリン南部のアイヌの人々を道案内にしてサハリン西海岸を北上したとき、彼らは極度にそれを嫌った〔松田 一九七二〕。スメレンクルたちを恐れていたのである。その背景には一三、一四世



『北夷分界余話』（国立公文書館蔵）より。

図4 ヌメレンクル夷（ニヴフ）男性



『北夷分界余話』（国立公文書館蔵）より。

図5 ヌメレンクル夷（ニヴフ）女性

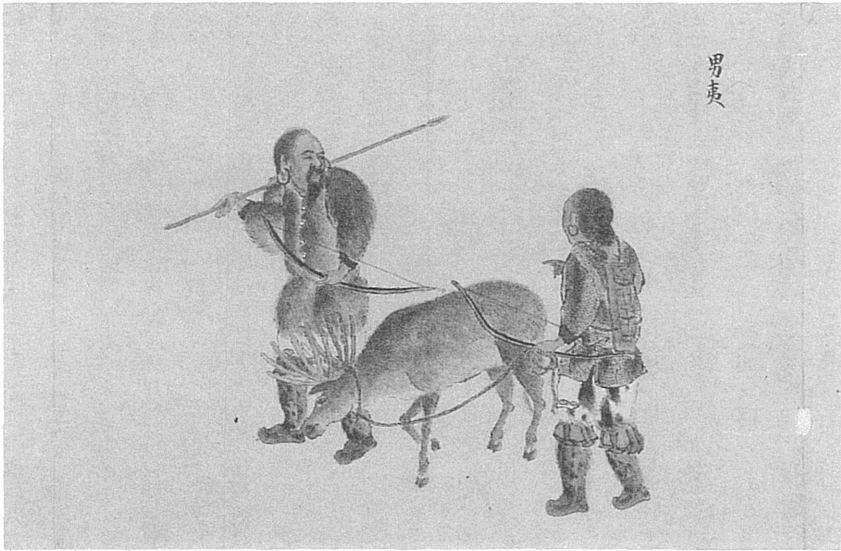
紀の骨鬼（クギ）と吉烈迷（ギレミ）の戦い以来の対立が関係しているのかもしれない（第Ⅱ部第一章の中村和之論文を参照）。近代のアイヌの間でもニヅフとの戦いの伝承が残されていた「中村チヨ・村崎・アウステルリツ 一九九二」。後述のように、タライカ地方のアイヌとニクブンの関係も良好ではなかったようである。

エゾ、スメレンクルに続いて江戸時代の調査者たちが接触したのが、ヲロツコと呼ばれた人々である。現在のウイルトアの祖先たちである。彼らはトナカイを飼うという周囲の人々には見られない特徴を有していたことから、明確に区別された。彼らは内陸部ではトナカイの背に荷物を積み、海岸地帯では舟に乗って交易の旅に出ていることが知られている。彼らはアニワ湾に面したクシユンコタン（現在のコルサコフ市の近傍にあった）に設置された松前藩や幕府の番屋にやってきてサンタン商人らと同じような中国製の絹織物や綿織物、ガラス玉などを毛皮、鉄製品と交換する交易活動に従事した。それは特に「ヲロツコ交易」と呼ばれる「末松 一九二八」（図6、図7）。

彼らもまた、アイヌとは友好関係にはなかった。特にタライカのアイヌとの間で激しい戦いが繰り広げられたことがあり（タライカ合戦）、それは双方に伝承として残されてきた。両者の険悪な関係は中村小市郎がすでに記録しており、「ヲロコとニクブンは互に縁組いたす。タライカ始唐太附の夷人は縁組不致ヲロコニクブン共山丹人共縁組無之由。」「中村小市郎 一八〇二」と指摘している。

前述のように大陸側の住民は、スメレンクル、サンタン、コルデツケ、キヤツカラ、イダー、キーレンなどと区分されていた。このうち、サハリンで日本側と直接接する機会を持っていたのはスメレンクルとサンタンである。コルデツケもまれではあるがサハリン南端にあった白土の会所に来るサンタン商人らに混ざってやってくることもあった「中村小市郎 一八〇一、二頁」。

間宮林蔵の観察によるスメレンクル、サンタン、コルデツケの区別の仕方が興味深い。彼によれば、スメレンクルとサンタンに関しては、「住夷（サンタンのこと―筆者注）の容貌カラフト島中のスメレンクル夷に異なる事な



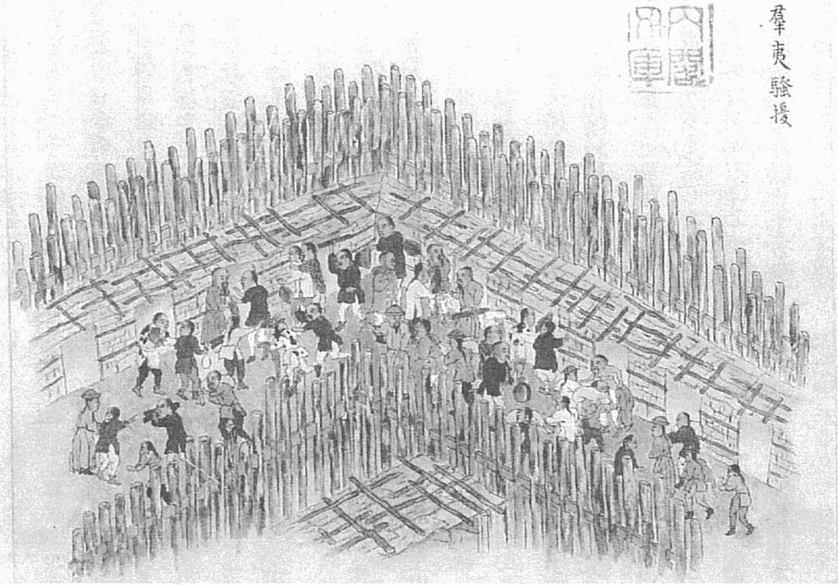
【北夷分界余話】（国立公文書館蔵）より。

図6 ヲロツコ夷（ウイльта）男性



【北夷分界余話】（国立公文書館蔵）より。

図7 ヲロツコ夷（ウイльта）女性



『東韃地方紀行』（国立公文書館蔵）より。

図8 群夷騷擾

し。然れども、其言語大に異にして弁ずべからざるもの多し」〔間宮 一九八五、一二九頁〕といつて、顔つきなどはほとんど同じなのに、言語が全く異なるという。それに対してサンタンとコルデツケについては、「地夷（コルデツケのこと―筆者注）の容貌理髪、其他衣服に至るまで、山旦夷に異なる事なし。其言語は小異ありといへども、一日の帯泊中、其詳なる事を知らず」、「地夷の内満洲夷のごとく剃頭の者あるを見しかども……」〔間宮 一九八五、一三一頁〕、と述べて、言語が似通っているのに対して、髪型に違いが見られるというのである（図8）。

この指摘は、近代の人類学者や民族学者による言語系統分類と民族区分とに見事に符合する。すなわち、林蔵の観察を近現代の民族学で再解釈すれば、スメレンクルとサンタンの間の差異は近現代のウリチとニヴフの差異を表す。すなわち両民族は服装、髪型などがほぼ同じだったのに対して、言語がニヴフ語とツングース系のウリチ語という系統すら異なる

る言語を固有言語としていた。他方、サンタンとコルデッケの相違は、ツングース系の言語を話す者の中での習俗の相違を表す。弁髪の周囲に剃りを入れるか入れないかは満洲や清朝に対する親近感の表れの差で、事実上それはナイとウリチの差を表す。間宮林蔵はアムール川をデレンまで一度往復しただけで、スメレンクル、サンタン、コルデッケの言語と文化の異同を見事に見抜いていたといえるだろう。

キヤツカラ、イダー、キーレンについては、日本側の調査者たちはいずれも間接的な情報を得ていたに過ぎない。前述のように、キヤツカラは林蔵がサハリンのノテト（ティク）から大陸の入り江（現在のデ・カストリ湾）に渡ってきたときに、そこで満洲仮府デレンに向かう人々に出会ったにすぎない。イダーについてもホンコ川（アムグ二川）の河口にあった彼らの村を遠望したに過ぎない。それに対して、キーレンについては、直接出会ったものはいないものの、間宮林蔵が次のような伝承を伝えている。

キーレンと申人物は、サハリン川辺亦はマンゴ―川之東北余程奥山ニ住居候者ニ而、風俗はサンタン人之形も有之、亦は拾人之内ニ蝦夷人之如くニ断髪ニ而、蘭人之服ニ似タル服を着、言語はスメレンクル之言を能ク通候由。此人物はヌツチャ国附属之人之由ニ而、拾人之内ニは火打仕懸ケ之鉄炮所持仕、稀ニはマンゴ―川辺ニ山獵亦は交易としてまかり越し候事も有之候由。……〔間宮 一九八五、一八四―一八五頁〕

このキーレンとはロシア領内からきたエヴェンキと考えられている。「蘭人之服」に似た服装をし、火打ち式銃（「火打仕懸ケ之鉄炮」）を持つものもいた。エヴェンキはシヤンタル湾沿岸でニヴフと接触しており、スメレンクルの言葉をやましく話したということはニヴフ語を習得するほど親密に接していたことを表す。つまり、地元の住民にはネルチンスク条約によってロシアと清との間に設けられていた国境は意味をなしていなかったわけである。彼らの中には獲物や交易相手を求めて清側の地域に入る込むものがおり、その中にはサハリンまで足を伸ばすものもいたのだろう。

しかし、ロシアに属するものにはサハリンでの安全は保証されていなかった。間宮によれば、やってきて二年ほどは地元住民と平和共存できたが、その後何かの理由で対立が起き、結局一人も生き残れなかった。サハリンにやってきたキーレンと呼ばれた人々の運命は、サハリンにおける当時の日本、中国、ロシアの勢力関係が反映されている〔佐々木 一九九六〕。

3 清朝による住民区分

異文化集団を包含する国家、あるいは異文化集団によって構成される国家としては、中国は日本とは比較にならないほどの巨大な時間的、空間的スケールを持っていた。本章で考察対象とするアムール川下流域からサハリンにかけての地域でも、中国ではどんなに遅くても唐代にはこの地域の住民を分類し、名称を与えて記録していた。例えば現在の松花江下流域からアムール川中流域あたりにいたと考えられる「黒水靺鞨」やサハリンのオホーツク文化人ではないかともいわれる「流鬼」「菊池 一九八九・二〇〇一」などが『新唐書』や『唐会要』などに登場する。今日のニヅフの旧称であるギリヤークに近い名称「吉烈迷」(ギレミ Gilemi)と読ませる)が登場するのは、金王朝の正史『金史』である。そして、モンゴル軍が遠征し、アムール川流域の直接支配を行った元代になると、「吉烈迷」はアムール川河口周辺からサハリン北部の住民として詳しい民族誌的情報が付加されるようになり、サハリンの住民として「骨鬼」(クギ *Kugi*)と読ませる)が登場する(『元史』、『元文類』、『開原新志』など)。他方アムール川流域には「女真」のほか、大河に生きるタタール人を意味する「水韃韃」という住民が登場する(『元史』)。吉烈迷と骨鬼は対立関係にあり、先に元王朝に服従した吉烈迷が骨鬼の攻撃を受けて元に助けを求めたことが、元軍のサハリン進出の一因となった。後に吉烈迷の一部は骨鬼とともに軍事行動を起こすが、元軍に平定された(第Ⅱ部第一章の中村論文参照)。

明代に入るとアムール川下流域の住民は基本的に「野人女真」というグループの一員として認識される。一四一三年に現在のティール村に設置された奴兒干都指揮使司に付随して建立された永寧寺の碑文（「永寧寺碑」）に彫られた女真語の碑文では漢文の「野人」ということばに「ウディグ」(Udige) ということばが当てられている。「叢・趙一九八五、一八七頁」。このウディグという名称は森の人という意味合いを持つ。この名称には女真文字と女真文語を作成した中国東北地方の女真たちのアムール下流方面の人々に対する認識が反映しているのかもしれない(図9)。永寧寺碑にはウディグ以外に、やはり吉烈迷(ギレミ(Gilemi)、苦兀(または苦夷、クイ(Kuyiと読む))といった集団名が登場する。両者はほぼ元代の吉烈迷と骨鬼という分類、名称を受け継いだものである。

清代に入ると野人すなわちウディグと呼ばれた人々がいくつかのグループに分類されて史料に登場するようになる。一六世紀末から一七世紀初めの清朝興隆期の記録である『満文老檔』や『満洲実録』にはウエジベシ、ワルカ Warka、フルハ Hürha、イエンダフン・タクララ・グルン Yendahun takurara gurun などというグループが見られる。「清実録一」一九八五、満文老檔一(太祖一)一九五〇³⁾。これらの集団名の現れ方に関しては、これらの史料の校訂が行われて以来、東洋史学者の間で活発な議論が交わされた「田中克己 一九五九、阿南 一九八〇、吉田 一九七四、増井 一九八三」。しかし、それを人類学的な視点で見直すと、この三つの集団名の使われ方は、実際の人間集団の移動と、史料の編者たちの認識の変化の両方が反映されていると見るべきである。すなわち、清朝を建国した建州女真の勢力に近かった牡丹江流域から図門江(豆満江)、スイフン川(綏芬河)などの流域や現在のロシア沿海地方南部地域の人々は、ウエジ、ワルカなどと呼ばれていたが、初代ヌルハチ(太祖、在位一六一六年〜二六年)、二代目ホンタイジ(太宗、在位一六二六年〜四三年)の時代から満洲八旗に編入されて多くの住民が中国に近い地方に移住させられ、一七世紀前半までに人口がかなり減っていた。そのためにヌルハチたちに対する対抗勢力とは見られなくなり、次第に地名として、あるいは東北辺境地域の住民の総称として使われるに過ぎなくなつたと考え

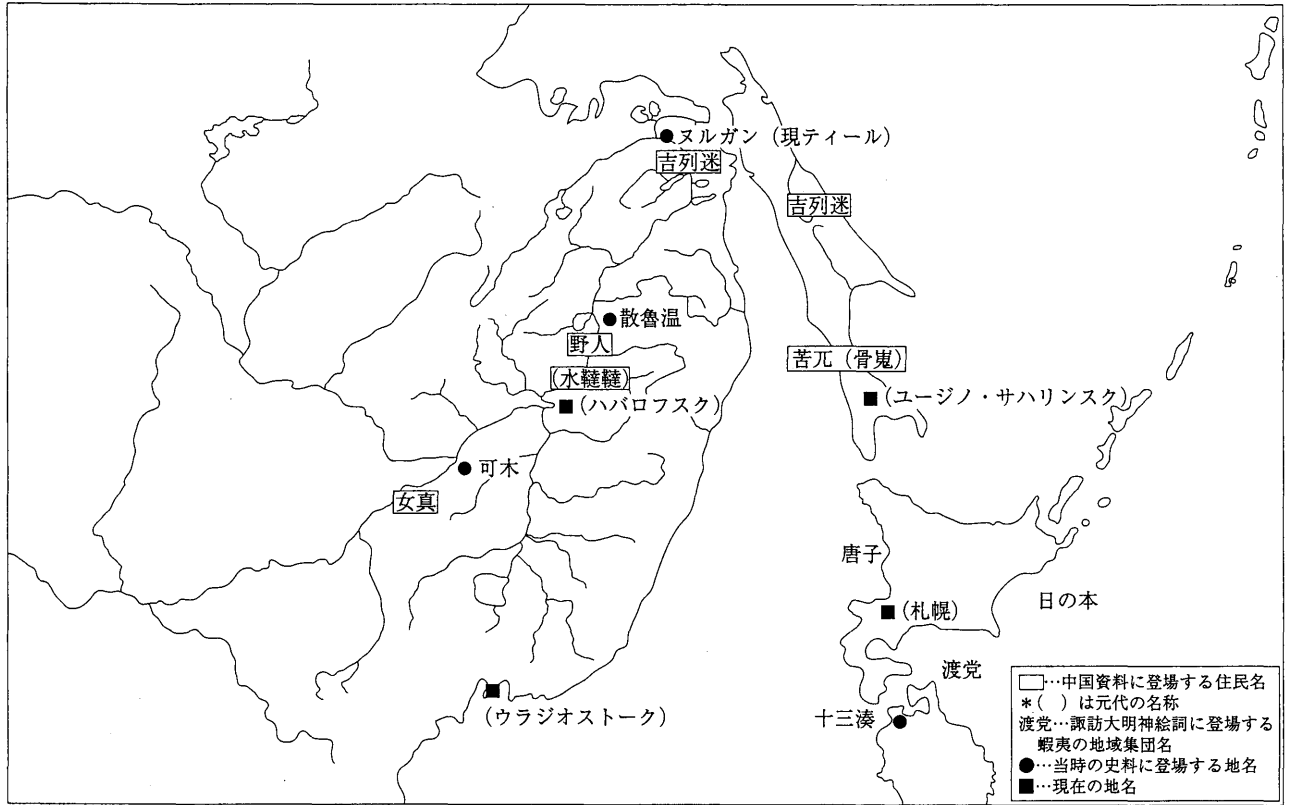


図9 元明時代の住民分布

られる。

それに対して、牡丹江流域から松花江、そしてアムール川中流域にいたとされるフルハの場合には、八旗に編入される者もいたが、その多くが毛皮貢納民（「辺民」）として地元に残った。場合によっては移住によって人がいなくなった旧フルカの居住地（例えばウスリー川流域など）に移った人々もいたかもしれない。そのために、フルハという名称と集団の居住範囲は拡大し、四代目の康熙帝（聖祖、在位一六六一年～一七二一年）の時代までその存在が認められていた。しかも、ホントイジの治世の後半から三代目順治帝（世祖、在位一六四三年～一六二一年）の時代まで、フルハは東北地方の毛皮貢納民の代表的な集団だった（ウエジ、ワルカ、フルハの位置関係については第Ⅱ部第二章の杉山論文参照）。

太祖ヌルハチの時代からアムール川下流域にはイェンダフン（またはインダフン）・タクララ・グルンと呼ばれる人々と地域が認められていた。これは漢文では「使犬国」、「使犬部」、「使犬部落」、「使狗地方」などと表される（以後本章では「使犬部」とする）。犬を飼い、犬ぞりを主要な交通手段としていたことを特徴とすると見られた人々である。彼らは太祖の時代に毛皮を貢納したことがあったが、本格的に清朝と関係を維持するようになるのは順治帝の時代になってからである。そして、それ以後アムール川下流域ではフルハと使犬部の境界が徐々に下流に移動する。両者の間の人の入れ替わりと分布の移動は、人々の移住ではなく、使犬部からフルハへと認定変更される人々が増えたことに起因する〔佐々木 一九九四〕。

アムール川を巡るロシアとの紛争が始まり、使犬部をはじめ、アムール川下流域からサハリンの住民までが毛皮貢納に応じるようになると、清の集団認識、集団識別方法がさらに大きく変わった。まず、使犬部より下流にフィヤカ（飛牙喀、費雅喀）、サハリンにクイエ（庫頁）、アムール川の支流地域にキレル（欺勒爾、奇勒爾）、キヤカラ（奇雅喀喇）といった集団が認められるようになった。ついで、四代目の康熙帝の時代となると一六七〇年代からフルハの

毛皮貢納民を満洲八旗に編入する作業（新満洲八旗の編成）が始まり、そこから取り残されて毛皮貢納民にとどまったフルハは、その氏族（ハラ）の数から、「八姓」、「七姓」あるいは「剃髪黒金」（頭を剃ったヘジェという意味）などと呼ばれた。彼らには満洲と同じく、頭の周囲を剃った上で弁髪を結う髪型が普及していたのである。一方、毛皮貢納民の主力は使犬部の方に移り、その頃より使犬部に代わって「ヘジェ」（黒金、赫哲）という呼称がより多く使われるようになる。当時旧使犬部のヘジェには頭を剃る習慣が普及していなかったらしく「不剃髪黒金」と呼ばれた。そのような呼称上の区別は楊賓の『柳辺紀略』から知ることができる〔楊賓 一九八五、二五一頁〕。

一八世紀に入ると、旧毛皮貢納民からの満洲八旗編成作業はさらに進み、一七二二（康熙五一）年から一七三二（雍正一〇）年までの間にアムール川中流域とウスリー川流域の人々も八旗に編入されて、旧フルハ出身の毛皮貢納民はほぼ消滅し、毛皮貢納制度はヘジェと呼ばれる人々を中心に構成されるようになった。乾隆年間（一七三六年〜九五年）の清朝全盛期は毛皮貢納制度の全盛期でもあったが、この時代に東北の毛皮貢納民として清朝の役所（牡丹江中流の寧古塔にあった寧古塔副都統衙門と牡丹江の河口の三姓にあった三姓副都統衙門）に登録された人々は、ヘジェ、キレル、キヤカラ、フィヤカ、オロンチョ、クイエの六つの集団に分類されていた（図10）。

これらの集団の属性については、一七六一（乾隆二六）年に完成したとされる『皇清職貢図』巻三にまとめられている。この書物は、清朝に朝貢にやってくる人々の民族誌的データを男女の姿を描いた図入りで解説したものである〔傅恒等 一九九二、二四四頁〕。それによれば、まずクイエ（庫葉）は東海の雅丹（ヤダン）、達里漢（ダリカ）の地に居住していた。雅丹とはサハリン南部西海岸にあったアイヌの有力集落ナヨロを指し、達里漢はサハリン中部のタライカ湖に面したタライカ地方を指すとされる。これらの地名とその服装などに関する記録から彼らはサハリンのアイヌの祖先であることがわかる。クイエという名称は元代の骨嵬、明代の苦兀を引き継いだものである。

フィヤカ（費雅喀）は現在のアムール川下流域からサハリン北部にかけての地域にいた人々である。犬の毛皮と思

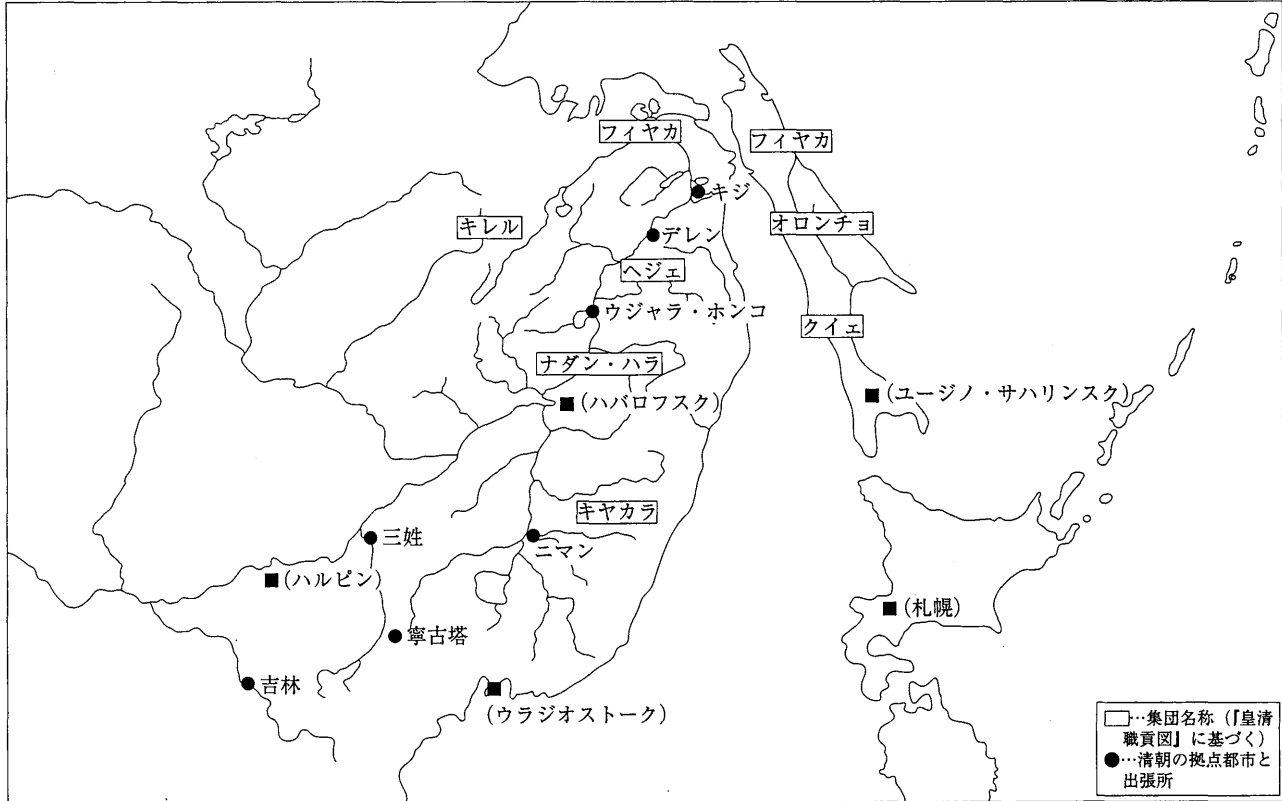


図10 清代の住民分布

われる外套を着て、クロテンと思われる毛皮獣を下げた男性の姿などから今日のニヴフの祖先を指すだろうと思われる。しかし、ニヴフ語とは異なるツングース系の言語を話しながら、衣食住などの物質文化やクマ儀礼などの精神文化に強い共通性を持っていたウリチが含まれる可能性が高い。このフィヤカという名称の語源は不明である。元代、明代には吉烈迷（ギレミ）と呼ばれた人々の子孫に当たると、満洲は彼らをフィヤカという全く異なる名称で呼んだ。オロンチヨ（鄂倫棹または鄂倫春）もクイエ同様やはり東海の島にあり、シカを飼うことで知られていた。このシカとは明らかにトナカイのことである。男性の図ではトナカイと思われるシカの手綱を持つ姿で描かれている。このことから彼らが現在のウイルタの祖先であることがわかる。オロンチヨという満洲語の名称は後のオロチヨンさらにはアイヌ語に由来する日本側の名称であるラロツコにつながる名称である。

キレル（皇清職貢図ではキレンあるいは奇楞）はホンコ・ピラ（アムグニ川）、ゴリン川、クル川、ウルミ川などアムール川左岸に流れ込む流域にいた人々で、今日のネギダール、エヴェンキ、あるいは後にナーナイに同化された人々（ナーナイのキレ・ハラやサマル・ハラなど）の祖先に当たる。それに対してキヤカラ（恰喀拉あるいは奇雅喀喇）は、アムール川右岸やウスリー川に注ぐ支流の流域にいた人々で、今日のオロチ、ウデへの祖先に当たる。現在彼らは白樺樹皮製のボートは使わないが、『皇清職貢図』には樹皮舟に乗って漁に出かける男性が描かれている。

『皇清職貢図』ではヘジェがヘジェ（赫哲）とナダン・ハラ（七姓）とに分かれている。両者の境界はウジャラ・ホンコ（烏扎拉洪科）というところにあったというが、それは現在のボロン湖の少し下流の左岸にあった地名で、現在のナーナイ語では「オジャラ・ホンコニ」（オジャラの岬を意味する）という。この地点を境にして、上流にいたナダン・ハラは漁撈や狩猟とともに農耕にも従事したのに対して、下流にいたヘジェは農耕を行っていないかたさされている。つまり、一八世紀当時にはここに農業の限界線があった。また、ナダン・ハラには一七世紀に毛皮貢納を始めたフルハと使犬部の子孫が含まれていて、文化的、習俗的に満洲により近かったという事情があったのかもしれない。

ない。ナダン・ハラの七つの氏族（ハラ）については松浦茂が寧古塔副都統衙門檔案や三姓副都統衙門檔案などから復元を試みている〔松浦茂 一九九七〕。

ヘジェ、フィヤカ、キヤカラ、キレル、オロンチヨ、クイエという六つの集団名は、乾隆年間以後、アムール川下流域とサハリンの住民の分類として定着し、若干の微調整はあつたが、清朝末期まで維持されることになる。

4 近代民族学による区分との比較

ヨーロッパで生まれた人類学あるいは民族学の方法論に基づくアムール川下流域とサハリンの住民の民族分類は、シ・シュレンクによるものが最初である。彼はロシア帝室アカデミーの支援を受けて、民族学者、動植物学者、気象学者、地質学者らからなる学術調査団を組織して、一八五四年から五六年まで足かけ三年にわたってアムール川流域とサハリン北部を実際に調査した。それに基づいた報告書は一八五八年から一九〇〇年にかけてまずドイツ語で出版され（民族学の巻は一八八一年、九五年に刊行）、次いで一八八三年から一九〇三年にかけて民族学の部分がロシア語で執筆されて出版された。そこで彼は自らの調査結果とともに、ロシア内外で出版されたこの地域に関する歴史記録、旅行記、地誌、民族誌などを広く渉猟し、この地域の民族分類方法を確立した。彼が参照した文献の中にはシールボルトが翻訳した最上徳内と間宮林蔵の著作も含まれている。

シュレンクの分類は基本的に言語系統による。しかし、同じ言語系統にある人々の民族分類には物質文化、精神文化における顕著な特徴と住民自身の帰属意識も指標とされている。彼はまずアムール川下流域とサハリンの住民を言語系統別にニヅフ語を話す人々と、アイヌ語を話す人々、そしてツングース諸語を話す人々の三つのグループに分類した。そして、ニヅフ語とアイヌ語を話す人々をそれぞれ一民族と認定し（ギリヤークとアイヌ）、ツングース諸語

を話す人々を複数の民族に分類した。すなわち、ゴリド（現在名ナーナイ）、オルチャ（現在名ウリチ）、オロチ（現在はオロチとウデへに二分されている）、ネギダール、オロキ（現在名ウイルタ）、キレ（現在はナーナイの一派とされる）、サマギール（現在はナーナイの一派とされる）、ピラル（現在はロシアではエヴェンキに入れられ、中国では鄂倫春族とされる）、マネグル（現在はロシアではエヴェンキに入れられ、中国では鄂倫春族とされる）、ツングース（現在名エヴェンキ）、そしてダフル（ダフル語はモンゴル語の一種であり、彼らをツングース系としたのはシュレンクの誤りだった）である [Шренк 1883: 11-12]。

現在のロシアで公認されているこの地域の先住民は、ナーナイ、ウリチ、ウデへ、オロチ、ターズ、ネギダール、ウイルタ、エヴェンキ、ニヅフ、アイヌだが、その基本となる分類方針はシュレンクが確立したものが踏襲されている。すなわち、言語と一部の特徴的な文化、そして住民自身の帰属意識を基準に分類するという方針は継承された。シュレンク後の民族学者による変更は修正のレベルで、シュレンクがオロチと一括して分類したアムール川とウスリー川右岸の支流域の住民をウデへとオロチに二分したり、キレとサマギールという民族をナーナイの一部と認定し直したりした程度だった。ただし、ソ連時代に入って、物質文化や精神文化に近代化の波が押し寄せて、そこに民族的な特徴を見いだしにくくなるとともに、帰属意識重視の傾向が強くなった。しかもその帰属意識もソ連時代の戸籍政策や民族政策によって強化されてきたという側面を持つ「佐々木 二〇〇一」(図11)。

二〇世紀までの歴史学や民族学では、このシュレンクによる分類が学術的(民族学的)な区分とされて正当化され、それ以前の清朝の中国や江戸幕府の日本が行った分類は不完全なものとされるか、過去の住民分布を反映したものとされることが多かった。ことに中国で行われていた分類の場合、調査者に地理学や民族学の専門知識を持たない軍人や行政官の場合が多かったこと、一八世紀初頭にイエズス会士が調査を行って以来、学術調査のために人が派遣されたことがなく、住民の社会や文化に関する情報がそれ以後ほとんど更新されてこなかったために、情報の精度が



R. K. マーク [Maak 1859] による。

図 11 アムールの先住諸民族

粗い。しかも、一八、一九世紀に住民の間で起きた居住地の移動や文化変容が反映されておらず、シュレンクの種類との差異が大きい(図12)。

それに対して、江戸時代の日本の調査者による分類とシュレンクの種類は近い。シュレンクがシーボルトの訳を通じて最上徳内や間宮林蔵の著作を知っていたことが影響しているともいえるが、両者とも地理学や民族学の専門知識をもった調査者による実地調査で得られた情報を直接分類の基礎にしているからである。両者の決定的な相違は、日本側がニヅフ語を話す人々とアイヌ語を話す人々を細かく分類し、シュレンクがツングース系の言語を話す人々を細かく分類している点である。

言語学が発達した欧米の民族学では、言語は住民分類の中で最も重要な分類基準であり、言語系統は大分類の基礎であった。シュレンクもそれに従っている。ただし、彼がアイヌとニヅフを一民族としてしまったことには、彼らの地理的な位置関係とシュレンクらとの親密度の違いが関係している可能性がある。すなわ

ナダン・ハラ	ヘジェ	フィヤカ		オロン チョ	クイエ
コルデッケ	サンタン	スメレン クル	ニクブン	ラロツコ	タライカ エゾ
ゴリド (ナーナイ)	オルチャ (ウリチ)	ギリヤーク (ニヅフ)		オロク (ウイルタ)	アイヌ

上段：18世紀中期の中国（皇清職貢図）

中段：19世紀初期の日本（間宮林蔵）

下段：19世紀のロシア（L. シュレンク）

図 12 中国・日本・ロシアの住民区分の比較

ち、ロシアはエヴェンキを始めツングース系の住民を支配する歴史が長かったため、ツングース諸語に関する情報と知識は豊富だった。

それに対して、ロシア側には一九世紀中期の段階ではニヴフ語とアイヌ語に精通するものはいなかった。したがって、アムール川流域で話されるニヴフ語とサハリン東海岸で話されるニヴフ語の違いがどの程度なのか、聞き取れるものがないなかったのである。日本側の調査者もおそらく言語的な違いは知らなかっただろう。しかし、敵対していたとはいえ、スメレンクルやニクブンと接する機会が多かったアイヌの人々は、彼らを細かく観察しており、文化的相違も見極めて、スメレンクルとニクブンという分類をしていたと考えられる。日本側はそれを採用したのである。アイヌの分類についても同様である、シュレンクと江戸時代の日本の分類の相違は、緊密に接触し、情報を多く持つ部分の分類が細かく、詳しくなったことで生じたものといえるだろう。

近代の人類学、民族学による住民の民族分類は、民族の概念の定義に関する論争を経て、二〇世紀に入ると精緻さ

と厳密さが求められるようになった。例えば、ソ連ではスターリンが民族の定義に関するテーゼを発表し「田中克彦 一九七八」、ソヴィエト民族学はそれに則って一九三〇年代にシベリア、極東地域の諸民族の分類と名称を見直した。それが現在まで続くこの地域の民族区分と名称の原型である。また、中国でも一九五〇年代に共産党政権がやはりスターリンの定義に則って「民族識別工作」なるものを実施し、その結果国民の大多数を漢民族と五五の少数民族とに分類した。

民族という概念を精緻化、厳密化しようとする動きは、人類学、民族学という分野の純粋に学術的な関心から生まれたとともに、植民地あるいは領土内に異文化集団を抱える国家、政府の要望にも合致するものだった。民族集団を厳密に定義する必要性は、異文化集団を個人レベルにまで掘り下げて統治するために必要不可欠な作業だったからである。

前近代的な帝国や封建的な国家の場合、包含した異文化集団の統治単位は個人ではなく集団や地域であり、政府が直接接するのはその集団や地域の首長層だけだった。そのような場合に国家や政府が必要としたのは、その集団や地域の名称と属性であり、その属性とは衣食住や宗教などの目に見える表面的な文化的特徴とコミュニケーション手段としての言語だった。それも、文化や社会の構造といった内部の詳細な情報ではなく、言語系統や文化圏といった他集団、他地域との関係がわかるような特徴についての情報だった。そのため、前近代国家の場合には、民族に類する集団を識別しても、厳密な分類、識別は必要なく、その人々がどのような名称で呼ばれ、どのような系統の言語を話し、その文化の概略がどのようなもので、周辺の諸集団とどのような関係を持っているのか、という情報が重要だった。

基本的に『皇清職貢図』に盛り込まれている情報はすべてそのようなたぐいのものである。そして、この程度の情報ならば、民族学や人類学の専門家でなくても収集可能だった。地理学や測量の専門知識を持った間宮林蔵の場合に

は遙かに詳細なデータを集めたが、その性格は『皇清職貢図』と同じである。林蔵の『北夷分界余話』に記述された「エゾ」、「スメレンクル」、「ヲロツコ」の民族誌的記述は項目別に分かれ、構造化されているが、各集団の社会や文化の中の関係性からその構造を解明しようとしたわけではない。実はシュレンクの民族誌も同じである。彼もアムール川流域やサハリンの諸民族の文化を項目別に分類し、大項目から小項目まで構造化して記述したが、文化の構造を理解するということはしなかった。それはこれらの民族誌が前近代的な国家の必要によって生まれた、あるいはその要請に合致したものだからだといえるだろう。

しかし、異文化集団を統治下に抱える近代帝国主義国家（イギリス、フランス）やそれを目指す後続国家（アメリカ、ドイツ、ロシア、明治日本など）は、国民国家を母体としていたり、その性格を有したりしたために、統治単位を個人レベルにまでおろした。後発帝国主義国家である帝政ロシアは、一八二〇年代に前近代的帝国としての異文化集団統治の体制を整えたが（いわゆるスペランスキーの改革、そこではシベリアの非ロシア系住民に対する統治は基本的に各民族や氏族の首長を介した間接統治だった）、欧米の帝国主義国家との競争の中で一九世紀末期には直接統治体制に舵を切った。すなわち、一八九七年に初めて国勢調査を行い、極北や極東といった遠隔地にまで調査官を派遣して住民を個人単位で把握することに努めたのである。それは不完全なものだったが、それ以来、ロシアは遠隔地といえども住民を直接把握する政策をとるようになり、近代帝国主義国家への脱皮を図った。その意図はソ連時代に達成された。

ロシアの例に端的に見られるように、多民族国家、多文化国家が個人単位で住民を把握しようとするときに、必ずその属性として着目するのが民族という集団への帰属である。そして、その民族という集団の定義を厳密に定めようとする。それは統治に一貫性を持たせるためである。そのような状況下で民族に関する情報として必要になるのは、他集団との関係性ではなく、その民族内部の構造である。いいかえれば、民族内における個人間の関係、下位集団間

の関係、文化要素間の関係、すなわち社会構造であり、文化の構造である。国家は個人を知ること、支配下にある異文化集団を知り、また異文化集団の構造を知ること、その個人を知ることができるようになる。近代の人類学や民族学が、社会構造論や文化の構造的な理解という方法論を開発し、それに傾斜していくようになるのは、知識人たちの知的潮流とともに、近代国家の統治政策も関わっていたと考えられる。

アムール川下流域やサハリンの住民に関する人類学的、民族学的研究でも、一九世紀末期からその様相が変わり、L・Ya・シユテルンベルクのニヴフ社会の構造研究が現れ〔Штернберг 1933〕、それはナーナイ、ウリチ、エヴェンキなどの民族の社会研究にも拡大して、く〔Зонгарев 1939〕、シロコトロフ 一九四一〕。日本でも一九四〇年に発表された石田英一郎のウイльта研究は、彼らの社会の内部を詳細に記述するものであり〔石田 一九四〇〕、戦後の一九五〇年代から八〇年代にかけて渡辺仁によるアイヌの社会や文化の構造を体系的に記述する研究〔Watanabe 1973〕が発表されるようになった

以上、前近代における異文化集団の区分方法と近代における民族区分とを比較し、その相違の背景に国家の統治方法の違いがあることが明らかにした。さらに、学術分野としての人類学や民族学も、いかに純粹に学術的な議論の中で民族、あるいは民族に類する概念の定義を検討していようと、そこには当時の政治情勢や統治上の必要性などが関わっていたことも明らかされた。

5 おわりに

本章では、アムール川下流域とサハリンの住民に対する江戸時代の日本と清朝の中国の民族的な住民区分を概説し、両者を近代民族学による民族区分と比較しながら、その特徴をあぶり出した。すなわち、前近代時代の日本で

は、幕府から派遣された地理学や測量の知識を持つ調査者たちの役割が大きく、彼らによる継続的な調査に基づいて住民区分が設定されていたこと、それに対して、中国では必ずしも地理学や測量の知識を持っていたわけではない人や軍人たちの見聞に基づき住民区分が行われていたこと、また、専門家を送った測量や調査は一八世紀初頭以来行われておらず、情報が更新されていなかったことなどが明らかにされた。

また、同じ比較から、この地域に対する前近代国家による統治と近代国家による統治の違いも鮮明にし、近代国家と密接に結びつきながら誕生し、独自の進化を遂げた人類学、民族学の特徴の一端も明らかにした。前近代国家では集団や地域単位での間接統治であり、重視されたのは集団間、地域間の関係性だった。そこでは集団そのものを厳密に設定するための基準や定義に関する議論が起きず、集団や地域の特徴も表面的、表層的なもので十分だった。それに対して、近代国家では統治は個人単位であり、個人の属性としての集団帰属が問題とされたために、集団そのものの定義と集団内における個人間、文化要素間の関係性が重視された。そのため、人類学や民族学で民族の定義に関する議論が熱を帯び、社会構造論や文化の構造的的理解に関する方法論が磨かれていくことになった。

ただ、今までの議論では区分された住民自身の意識が、このような民族的な区分にどこまで関係したのかについて触れられていなかったため、最後にその点に触れておこう。

江戸時代の日本の調査者による分類がサハリンのアイヌなどの地元住民の相互区分に依拠していることを指摘したが、中国側の分類も地元住民の相互区分が関係している。特に名称にそれがよく表れている。例えば「ヘジェ」とはこのアムール川流域のツングース系の言語では「下流」を意味しており、相互呼称として使われてきた。「キヤカラ」や「キレル」などは、アムール本流に暮らす人々の支流域に暮らす人々に対する呼称に由来している。

日本と中国の歴史記録に見られたこの地域の住民区分は、現在のロシアの先住民族区分には直接は反映されていない。それは幾重にも政治的な要因が絡むためである。しかし、当の先住民族の意識には若干ではあるがその名残を見

い出すことができる。例えば、ニヴフの間ではアムールからサハリン西海岸に在るニヴフとサハリン東海岸のニヴフの間に、スメレンクルとニクブンに相当する相違が、言語と文化両面で意識されている。中国側の区分でも同様で、『皇清職貢圖』のナダン・ハラ（七姓）とヘジェ（赫哲）の境界（ウジャラ・ホンコ）は、現在のナーナイ語の上流方言と下流方言の境界とほぼ一致する。

このような事情を考慮すると、前近代に日本側や中国側で設定された住民区分は、決して区分された住民の意識と無関係に設定されたものではなかった。その意味で住民の意識を反映させながらも行政でも使われている現在の民族と同様の性質を有していたといえるだろう。異なるのは、区分のための一貫した基準と定義の存在、文化と社会の構造的理解の有無、そして人々を個人レベルで把握するための参照枠として利用しようとする目的の有無だったのである。

注

- (1) 正確にはイチエ・ホトン。これは新しい町という意味。この町の正式の名称は満洲語でイラン・ハラ、漢語で三姓という。現在の黒竜江省ハルビン市依蘭県にあたり、かつて清朝のアムール、サハリン支配の拠点である三姓副都統衙門が設置されていた。
- (2) 松田伝十郎は「カラフト」という名称が外国を意味する「カラ」（唐）を想起させることから、「北蝦夷地」という新しい名称を提唱した。この名称はそれ以来幕末まで、サハリンに対する幕府の正式名称として使われた。
- (3) 清代の住民名は満洲語で表記されるために、本章ではカタカナ表記を優先し、必要に応じて漢字表記を付加することとする。
- (4) 一六四三年にヴァシーリー・ポヤルコフがアムール川下降に成功して以来、一六八九年のネルチンスク条約締結まで半世紀近くにわたって続いたアムール川の領有権を巡る清とロシアの間の紛争のことで、時に激しい戦闘も行われた。

参考文献

- 阿南惟敬 一九八〇『清初軍事史論考』（甲陽書房）
井上秀雄ほか 一九七六『東アジア民族誌——正史東夷伝』（平凡社）

- 石田英一郎 一九四〇「邦領南樺太オロッコの氏族に就いて(一)」『民族学年報』第三卷
 内田吟風ほか 一九七一「騎馬民族誌——正史北狄伝一」(平凡社)
- 菊池俊彦 一九八九「蘇軾と流鬼——7世紀の東北アジアの民族と文化」(北方言語・文化研究会編『民族接触——北の視点から』六興出版)。菊池俊彦「北東アジア古代文化の研究」(北海道大学図書刊行会、一九九五年)に再録
- 菊池俊彦 二〇〇一「夜叉国へ至る道——7世紀の北東アジアの歴史と地理」(考古学の学際的研究——濱田青陵賞受賞者記念論文集I)昭和堂。菊池俊彦「環オホーツク海古代文化の研究」(北海道大学図書刊行会、二〇〇四年)に再録
- 北構保男 一九八三「二六四三年アイヌ社会探訪記——フリース船隊航海記録」(雄山閣出版)
- 近藤重蔵 一九〇五(一八〇四)「辺要分解図考」(『近藤正齋全集』第三卷、国書刊行会)
- 坂倉源治郎 一九七二(一七三九)「北海随筆」(大友喜作編『北門叢書』二 国書刊行会)
- 佐々木史郎 一九九四「松花江におけるエスニックな出会い——フルハ部ゲイケル・ハラの軌跡」(黒田悦子編『エスニックな出会い』朝日新聞社)
- 佐々木史郎 一九九六「ロシア極東における政治情勢と民族間関係」(『民族の共存を求めて(一)』(重点領域「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯13) 北海道大学スラブ研究センター)
- 佐々木史郎 二〇〇一「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」(『国立民族学博物館研究報告』二六卷一号、国立民族学博物館)
- 佐々木史郎 二〇〇八「東アジア歴史世界におけるアイヌの役割」(榎森進・小口雅史・澤登寛聡編『北東アジアのなかのアイヌ世界』(アイヌ文化の成立と変容——交易と交流を中心として)下、岩田書店)
- シロコゴロフ、S. M. 田中克己・川久保悌郎訳 一九四一「北方ツングースの社会構成」(岩波書店)
- 末松保和 一九二八「近世に於ける北方問題の進展」(至文堂)
- 田中克己 一九五九「明末の野人女直について」(『東洋学報』第四二卷第二号、東洋文庫内東洋学術協会)
- 田中克彦 一九七八「言語から見た民族と国家」(岩波書店)
- 中村小市郎 一八〇一「唐松の根」(大阪大学中央図書館懷徳堂文庫所蔵)。刊本は「唐太雑記」高倉新一郎編『犀川会資料全』(北海道出版企画センター、一九八二年)
- 中村チヨ口述、R・アウステルリッツ採録、村崎恭子編 一九九二「ギリヤークの昔話」(北海道出版企画センター)

- 羽太正養 一九三七「休明光記」付録（北海道庁編『新撰北海道史』北海道庁）
- 洞 富雄 一九七三「北方領土の歴史と将来」（新樹社）
- マーク、R. K. 一九七二「アムール河流域民族誌」（『季刊ユーラシア』5・6・7号）
- 増井寛也 一九八三「清初の東海フルガ部とゴルドの形成過程」（『立命館史学』四号、立命館大学）
- 松浦 茂 一九九七「一八世紀のアムール川中流域における民族の交替」（『東洋学報』第七九卷第三号）。松浦茂 二〇〇八「清朝のアムール政策と少数民族」（京都大学学術出版会）に再録
- 松浦 茂 二〇〇三「十八世紀のサハリン交易とキジ事件」（京都大学総合人間学部紀要）第一〇巻、京都大学総合人間学部。松浦茂 二〇〇八「清朝のアムール政策と少数民族」（京都大学学術出版会）に再録
- 松浦武四郎 一九七七（一八五四）「北蝦夷餘誌」（松浦武四郎著・吉田武三編『松浦武四郎紀行集』下、富山房）
- 松田伝十郎 一九七二（一八二二）「北夷談」（大友喜作編『北門叢書』五 国書刊行会）
- 間宮林蔵 一九八五（一八一〇）「東韃地方紀行他」（洞富雄・谷澤尚一郎校注、平凡社）
- 満文老檔 一九五三―五九 満文老檔研究会訳注『満文老檔』太祖Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、太宗Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（東洋文庫）
- 最上徳内 一九七二（一七九九）「蝦夷草紙後編」（大友喜作編『北門叢書』三 国書刊行会）
- 吉田金一 一九七四「近代露清関係史」（近藤出版社）
- 叢佩遠・趙鳴岐編 一九八五、「曹廷杰集」下（中華書局、北京）
- 傅 恒等編 一九九二（一七六一）「皇清職貢図」（影印本）（中華書局、北京）
- 遼寧省檔案館・遼寧社会科学院歴史研究所・瀋陽故宮博物館編 一九八四「三姓副都統衙門滿文檔案訳編」（遼瀋書社、瀋陽）
- 清実録 一九八五「満洲実録」、「太祖実録」（『清実録』中華書局、北京）
- 楊 賓 一九八五「柳辺紀略」（『遼海叢書』1、遼瀋書社、瀋陽）
- Georgi, J. G. 1776 *Beschreibung aller Nationen des Russischen Reiches, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidungen und übrigen Merkwürdigkeiten*. St. Petersburg: Carl Wilhelm Müller.
- Maak, P. K. 1859 *Анна к путешеству на Амуре*. Санкт Петербург.
- Schrenck, L. von 1881 *Reisen und Forschungen in Amurlande in den Jahren 1854-1856*, Bd. 3, Die Völker des Amurlande, 1, St. Petersburg.
- Шренк, Л. И. 1883, 1899, 1903 *Об инородцах амурского края*. 3 тома. Санкт Петербург.

- Штернберг, Л. Я. *Гилки, орочи, гольды, негидлавыч, айны: статьи и материалы*. Под редакцией и с предисловием Я. П. Алькор (Кошкина). Хабаровск: Дальгиз
- Уаталабе, Н. 1973 *The Ainu Esouyem: Epitome and Grouc Statistics*. Seattle: The University of Washington Press.
- Золотарев, А. М. *Родовой строй и религия ульчей*. Хабаровск: Дальгиз